

青森市埋蔵文化財発掘調査報告書 第39集

市内遺跡

詳細分布調査報告書

平成9年度

青森市教育委員会

序

人口約30万人をかかえるこの青森市は、今年、市制施行百周年を迎え、県都としてはもとより、北東北の政治・経済・文化などの中心的役割を担う中核都市として発展しており、この発展は、恵まれた自然と共存して築かれてきた私たちの遠い祖先の足跡に支えられているものと認識しております。

青森市には、国指定史跡である三内丸山遺跡、小牧野遺跡をはじめ、私たちの遠い祖先が残してくれた貴重な文化遺産が多数確認されており、それらを次の世代へ継承していくことが私たちの責務ではないかと考えております。

貴重な文化遺産である遺跡の保護と市内の至るところで行われている各種開発事業との円滑な調整を図るため、当委員会では、国と県の補助金の交付を受けて、平成4年度から市内遺跡詳細分布調査を実施してきております。

本書は、平成9年度に実施した調査結果をまとめたものであり、埋蔵文化財の保護及び啓蒙、当市の歴史解明の一助となれば幸いです。

最後となりましたが、本書を刊行するにあたり文化庁・青森県教育庁文化課をはじめとした関係各機関、関係各位に対し、深く感謝の意を表する次第であります。

平成10年3月

青森市教育委員会

教育長 池田 敬

例 言

1. 本書は、国と県の補助金の交付を受けて平成9年度に実施した青森市内遺跡詳細分布調査事業の報告書である。
2. 本文中の遺跡の位置図には、国土地理院発行の2万5千分の1の地図を利用し、上辺を北に統一して掲載した。なお、範囲に関しては地中にあるという特異性により、あくまでも目安であり、確定的なものではない。
3. 分布調査において表面採集した遺物は、青森市教育委員会が保管している。
4. 本書の作成にあたり、次の方々にご協力を賜った。ここに深く感謝の意を表する次第である。
水田 政雄 長崎 勝巳 金山 晃道（敬称略）

目 次

序
例言
目次

第 章 事業実施の概要

第1節 調査目的..... 1

第2節 調査要項..... 2

第 章 調査成果

第1節 調査概要..... 3

第2節 新規登録遺跡..... 4

第3節 名称及び内容変更した遺跡と統合した遺跡..... 8

第 章 水系と縄文時代の遺跡の立地形態について 9

まとめ24

報告書抄録

第 章 事業実施の概要

第1節 調査目的

本市においては、近年、多種多様な大規模開発事業をはじめとした各種開発事業が増加しており、それに伴い破壊・消滅の危機に瀕している埋蔵文化財包蔵地も数多く認められる。

埋蔵文化財を保護し、開発事業との円滑な調整を図るためには、管内に所在する埋蔵文化財包蔵地に関する資料の充実に努めることが重要である。

以上の点を踏まえ、埋蔵文化財保護行政を推進していく上で、最も基本的なことは、市内に所在する埋蔵文化財包蔵地の現況・範囲・数の把握、新規遺跡の発見等の詳細な資料を整備しておくことであり、この事業を標記の事業名で国と県の補助金の交付を受け実施したものである。

第2節 調査要項

1. 対象地区

市内全域

2. 事業期間

平成9年4月1日～平成10年3月31日

3. 調査担当機関

青森市教育委員会

4. 調査体制

調査事務局

青森市教育委員会

教 育 長 池 田 敬

生涯学習部長 永 井 勇 司

社会教育課長 山 田 章

埋蔵文化財対策室長 遠 藤 正 夫

室 長 補 佐 福 士 敦

埋蔵文化財係長 石 岡 義 文

主 事 田 澤 淳 逸 (調査担当)

” 小 野 貴 之 (”)

” 木 村 淳 一 (”)

” 児 玉 大 成 (”)

” 沼 宮 内 陽 一 郎 (”)

” 設 楽 政 健 (”)

5. 調査指導機関

文化庁

青森県教育庁文化課

6. 調査方法

市内全域を対象とし、調査を行う。特に開発が予想される地域に所在する周知の遺跡の現状確認を重点的に行い、併せて市内各地域の新規遺跡の発見に努める。

第 章 調 査 成 果

第 1 節 調 査 概 要

調査は、4月中旬から12月初旬まで実施した。対象地区は、標高200m以上の山岳地帯と海、河川を除く市内全域とした。特に開発が予想される地域とその周辺を重点的に現地踏査を行い、畑地や露頭など地表面や断面の観察が可能な地点を調査した。また、開発申請のあった地区の現地立ち会いやその周辺調査も実施した。

その結果、新たに次の4遺跡を発見したので所定の手続きをとり、新規登録を行った。

新規登録遺跡

沢山地区 沢山平野（1）遺跡・沢山平野（2）遺跡

三内地区 三内丸山（7）遺跡

野木地区 野木山口（1）遺跡

また、青森県教育庁文化課との協議の結果、次の遺跡については、名称及び内容変更、統廃合を行った。

名称及び内容変更した遺跡（内容変更事項については、第3節参照）

安田地区

変更前

変更後

01014 安田水天宮（1）遺跡

01014 安田近野（1）遺跡

統廃合した遺跡

安田地区

統廃合前

統合後

01016 安田（2）遺跡

01016 安田（2）遺跡

01205 安田水天宮（2）遺跡



新規登録遺跡（ ）

1. 沢山平野（1）遺跡

2. 沢山平野（2）遺跡

3. 野木山口（1）遺跡

4. 三内丸山（7）遺跡

名称変更遺跡（ ）

5. 安田水天宮（1）遺跡

統廃合遺跡（ ）

6. 安田（2）遺跡

7. 安田水天宮（2）遺跡

第1図 位置図

第2節 新規登録遺跡

遺跡名	沢山平野(1)遺跡	立地	丘陵
遺跡番号	01288	現況	畑地
所在地	青森市大字沢山字平野	時代	縄文時代前期・中期・晩期
種別	散布地	遺物	縄文土器



写真1 近景



位置図1

遺跡名	沢山平野(2)遺跡	立地	丘陵
遺跡番号	01289	現況	畑地・山林
所在地	青森市大字沢山字平野	時代	縄文時代前期・中期・晩期・平安時代
種別	散布地	遺物	縄文土器・土師器



写真2 近景



位置図2

遺跡名	野木山口(1)遺跡	立地	丘陵
遺跡番号	01290	現況	水田・畑地
所在地	青森市大字野木字山口	時代	平安時代
種別	散布地	遺物	土師器



写真3 近景



位置図3

遺跡名	三内丸山(7)遺跡	立地	台地
遺跡番号	01291	現況	畑地
所在地	青森市三内字丸山	時代	平安時代
種別	散布地	遺物	土師器



写真4 近景



位置図4



第2図 表面採取資料



1. 沢山平野(1)



2. 沢山平野(1)



3. 沢山平野(1)



4. 沢山平野(2)



5. 沢山平野(2)



6. 沢山平野(2)



7. 沢山平野(2)



8. 沢山平野(2)



9. 沢山平野(2)



10. 沢山平野(2)



11. 沢山平野(2)



12. 沢山平野(2)



13. 沢山平野(2)



14. 沢山平野(2)



15. 野木山口(1)



16. 野木山口(1)



17. 野木山口(1)



18. 三内丸山(7)



19. 三内丸山(7)



20. 三内丸山(7)



21. 三内丸山(7)



22. 沢山平野(2)



23. 沢山平野(2)

第3節 名称及び内容変更した遺跡と統合した遺跡

1. 名称及び内容変更された遺跡

	遺 跡 名	所 在 地	時 期
変更前	安田水天宮(1)遺跡	青森市大字安田字近野	縄文 (前・中・後)
変更後	安田近野(1)遺跡	同上	縄文 (前・中・後)、平安



位置図5

本遺跡は、変更前の名称にある安田水天宮と約600m離れており、遺跡の範囲内に安田水天宮とは異なる安田神明宮が存在している。遺跡の所在地に実存していない安田水天宮の名称が用いられることによって、遺跡名を混同する恐れがあることから、遺跡名に安田水天宮の名称を用いるのは不適當であり、遺跡名を上記のとおり変更した。また、遺跡の範囲内で、土師器破片が採集されたことから、時期についても上記のとおり追加変更した。

2. 統廃合された遺跡

	遺 跡 名	所 在 地	時 期
統合前	安田(2)遺跡 (01016)	安田字近野、細越字栄山	縄文 (前・中)
	安田水天宮(2)遺跡 (01205)	細越字栄山	縄文 (後)
統合後	安田(2)遺跡 (01016) 01205は欠番とする	安田字近野、細越字栄山	縄文 (前・中・後)



位置図6

安田(2)遺跡と安田水天宮(2)遺跡は、左図のように、安田(2)遺跡の範囲内に安田水天宮(2)遺跡の範囲が内包されるという状況であったため、上記の表のとおり、統廃合を行った。

第 章 水系と縄文時代の遺跡の立地形態について

青森市内には、平成9年度の新規登録遺跡を含め、290カ所の周知の遺跡が分布しており、国指定史跡である三内丸山遺跡や小牧野遺跡をはじめ、とりわけ縄文時代に存続していた遺跡が数多く所在する。市内に所在する周知の遺跡の立地と市内の現流河川の流路を照らし合わせてみると、両者の相関関係は一目では捉えにくい。現流河川に加え、谷地形を含む水系の拡がりや市内に所在する遺跡の分布を重ねてみると、ほとんどの遺跡が河川や旧河川と思われる谷地形に隣接して立地している。青森市は、市域の北部から北西部にかけて、陸奥湾に面して青森平野が広がり、平野の南部には八甲田火山群に連なる火山性の台地（八甲田火山性台地）東部には東岳を中心とした比較的急峻な東岳山地、西部は開析が進んだ比較的緩傾斜の丘陵が広がっており、平野部は三方を山地に囲まれている。これらの山地、丘陵に源を発する河川や、河川に連結する旧河川と思われる谷地形が市内には数多く存在し、平野部をとおり、陸奥湾に注いでいる。これらは水源を基本とする水系として統括され、南部は八甲田火山群を中心とする放射状の水系、東部は折紙山・堀子岳などを中心とする放射状の水系、西部は大倉岳山地、大釈迦丘陵などを中心とする水系である。青森市内においては、このように現在流れている河川に加え、旧河川と思われる谷地形の拡がりや広い範囲にわたって確認でき、山地に源を発するこれらの放射状の水系は、平野部で合流して幾筋かの主要河川としてまとめ、陸奥湾に注いでいる。現流河川が縄文時代においても存在し、また、市内に広がる谷地形が、当時は水を湛えた川であったと仮定すれば、遺跡の立地と水系の拡がりや、密接な関係があると考えられる。そこで本項では、それぞれの主要河川としてまとめる一つの水系の周辺に存在する縄文時代の遺跡の地形的立地状況について、それらが時期ごとに差異を示すのかどうか、また水系ごとに差異が認められるのかどうか、考察を試みたいと思う。

狩猟採集経済の社会であった縄文時代においては、定住生活の成立が旧石器時代と一線を画する大きな特徴であるとされる。人々が遊動から定住へとその生活様式を変化させた要因については、気候変動による植生の変化や土器の普及を背景とする狩猟主存型経済から採集主存型経済への転換であるという説が一般的である。定住が行われることによって、新たな社会的・文化的構造が集落を根拠地として形成されることになるが、一定期間、一定の場所で生活を営むためには、その立地において、居住に適した地形的好条件、集団の衣食住を保障できる資源的好条件が充足されていなければならない。また、一定地域に複数の集団が存在していたことを考慮すれば、隣接する集団との間における縄張り意識も集落の立地に反映されていたことが想定される。したがって、定住という生活形態が成立することによって、その根拠地となる集落の立地には、資源的要因、地形的要因、社会的要因が大きく影響を及ぼしていたと考えられる。そして、人々の生業、精神生活を考慮すると、集落を中心とした複雑多様な行動パターンが想定され、集落とは異なる性格をもった痕跡が、調査によって認めることができる。このような複雑多様な行動パターンの痕跡は、集落と有機的に関連性をもって存在していたと理解されるべきであり、その根拠地となる集落は、一定の場所における定着性を強めながらも周期的な移動が繰り返されていたことも想定される。縄文時代の遺跡の立地は、縄文時代の生活形態、行動パターンを反映していたことが想定され、時期、遺跡の性格、周辺の地形的環境によって何らかの規則性をもっていたのかという問題は興味深い。

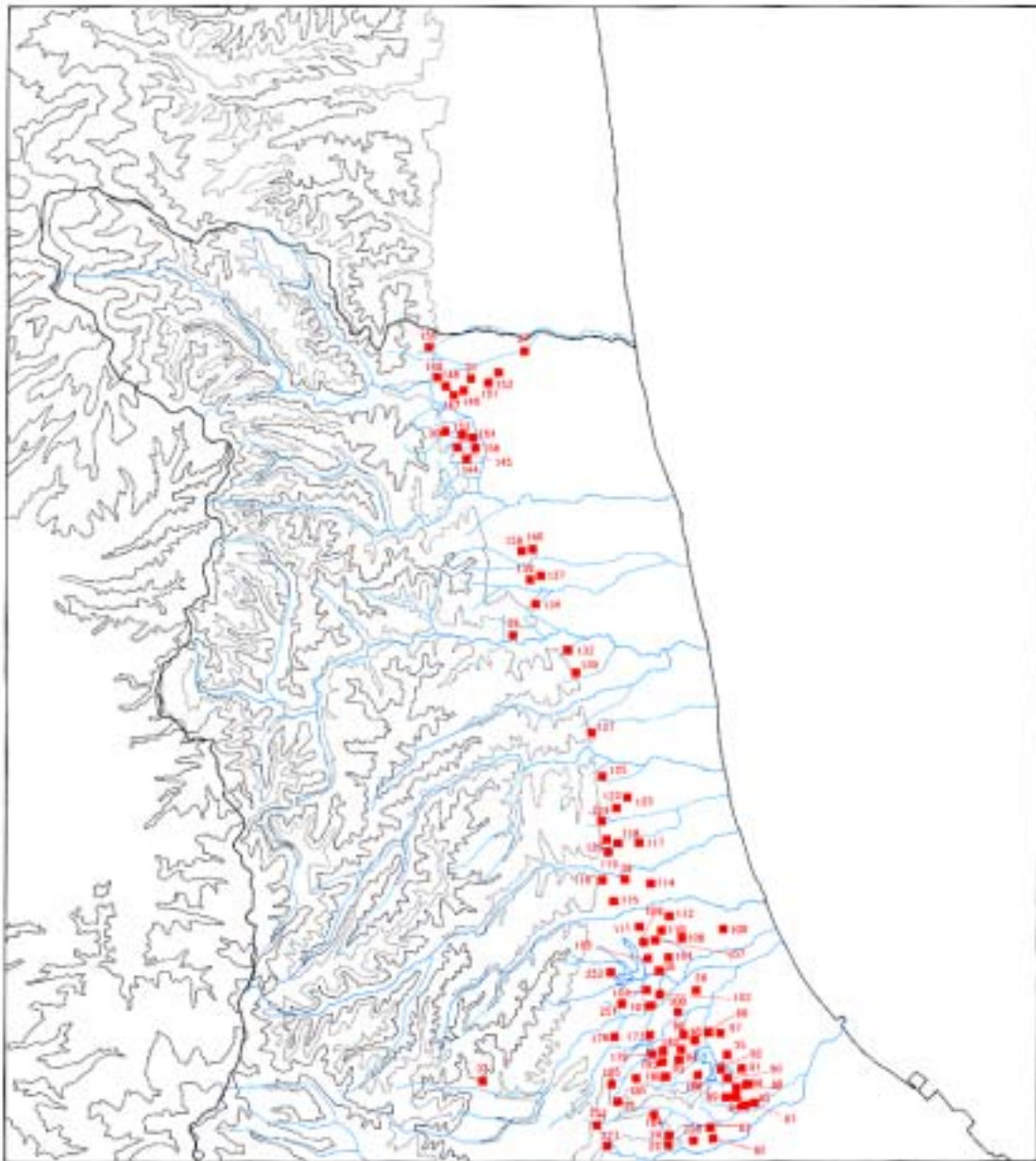
小林達雄は、多摩ニュータウン遺跡群の発掘調査による膨大な情報に基づき、縄文時代の遺跡について、A～Fのセトルメントパターンを設定し、集落論、領域論を内包した縄文社会の実態解明の方法論

の一端を示した。縄文時代の遺跡は「ある程度の自己完結性を帯びた有意の地理的環境の中で把握しうる」という前提のもとに、各々のセトルメントは、特定の立地条件、特定の機能を意識して設計されたことを想定し、「遺跡の立地条件を分析することによっても、いかなる種類のセトルメントの遺跡であるかを把握しうる期待がでてくる」としている。また遺跡の分布調査においても、地表面からの観察によって「遺跡の性格を明確に把握しうる部分」があり、遺跡の性格把握における分布調査の重要性を示している（小林 1973）。谷口康浩は、隣り合う地点の中間点に垂線を引き、それらの交点を挟んで作図されるティーセン多角形によって、縄文時代の集落の領域をモデル化している。谷口は、このような操作でモデル化された領域には種々の問題があるとしているが、「2つの拠点集落の領域が接する境界域には、多くの場合、河川や丘陵尾根などが位置しており、隣接する2集団の境界がそうした自然地形の要衝を境として取り決められていた可能性がある」と指摘している（谷口 1993）。また、谷口は「領域研究の目的は、領域そのものの線引きに終始することではなく、領域内の環境特性や内在する資源について考察しながら、単位集団の生活を生態学的に復元していく点にある」とし、集団領域研究の方向性についても言及している（谷口 1993）。

本項では、「隣接する2集団の境界」が、「自然地形の要衝を境として取り決められていた可能性がある。」という谷口の指摘に注目し、その要衝のひとつとして河川や谷地形を取り上げ、一つの水系を一集団の自己完結的な行動範囲と仮定し、その周辺に分布する遺跡の時期や地形的立地状況のバリエーションを整理し、それらを総合することによって、各時期における遺跡の立地形態をある程度具現化できるのではないかという仮説から考察を行った。まず、5万分の1の青森県遺跡地図（青森県教育委員会 1992）の油川地域、青森西部、青森東部、浅虫地域と、各地域の水系図（青森県 1982、1983、1984、1985）を重ね合わせることによって、周知の遺跡の範囲と河川や谷地形との位置関係を把握した。なお、第3図～第6図の表に掲載した時期については、縄文時代の時期のみを抽出した。そして、平野部の主要河川を基本単位としてそれに連結する小河川や谷地形を一つのまとまりとして、その周辺に分布する遺跡の時期を整理し（注1）、一つの水系の周辺に分布する遺跡群について、時期ごとにその立地形態を調べた。地形的立地状況の分類については、小林達雄が類型化したセトルメントパターンのうち、A～Dパターンの地形的立地状況を参考に、また市内の遺跡の立地形態を考慮して条件を追加し、以下の基準を設けた。

- a. 広い平坦面を有する台地上に立地する遺跡
- b. 馬の背状の舌状台地上に立地する遺跡
- c. 斜面裾部に立地する遺跡
- d. 丘陵頂部付近の狭い平坦面に立地する遺跡
- e. 海岸平野部に立地する遺跡
- f. かなりの急勾配の斜面地に立地する遺跡
- g. 谷底平野に立地する遺跡
- h. 扇状地に立地する遺跡

小林のセトルメントパターンでは、Cパターンとして「斜面裾部または丘陵部頂部付近などの狭い平坦面に立地」する遺跡として一つの類型とされているが、本項では、市内の遺跡立地状況に鑑み、小林の分類におけるCをcとdに細分した。

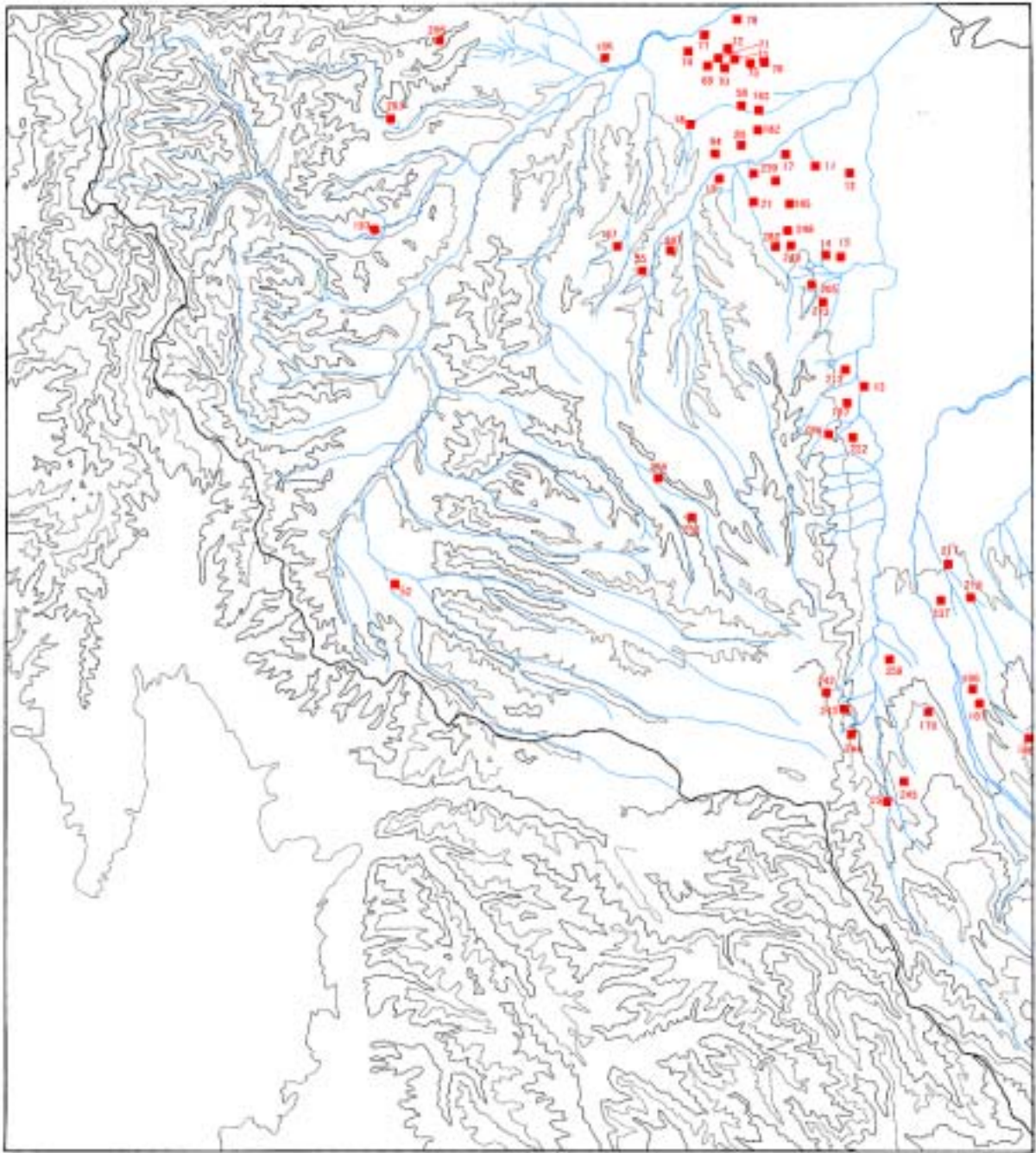


河川名	遺跡番号	遺跡名	時期	立地
後 湯 川	0102	磯部遺跡	縄文(後)	e
	01030	山城遺跡	縄文(後)	c
	01144	後湯(4)遺跡	縄文	c
	01145	後湯(5)遺跡	縄文(前)	c
	01146	四戸橋(1)遺跡	縄文(後)	e
	01147	四戸橋(2)遺跡	縄文(後)	e
	01148	四戸橋(3)遺跡	縄文(前)	e
	01149	四戸橋(4)遺跡	縄文(前・後)	e
	01150	後湯(6)遺跡	縄文(前)	c
	01151	後湯(7)遺跡	縄文(前・後)	e
	01152	後湯(8)遺跡	縄文(前・後)	e
	01153	後湯(9)遺跡	縄文(前・後)	c
	01154	後湯(10)遺跡	縄文(前)	c
	01155	後湯(12)遺跡	縄文(前)	c
	01029	大科支線口遺跡	縄文(前)	c
内真部川	01040	内真部(1)遺跡	縄文(前・後)	c
	01130	内真部(2)遺跡	縄文(前)	c
	01134	内真部(6)遺跡	縄文	c
	01136	小橋(1)遺跡	縄文(前)	e
	01137	小橋(2)遺跡	縄文(前)	e
	01139	小橋(4)遺跡	縄文(前)	e
	01140	小橋(5)遺跡	縄文	e
	奥 内 川	01125	前田(4)遺跡	縄文(後)
01127		前田(6)遺跡	縄文(前)	c
瀬戸子川	01039	山辺遺跡	縄文(前)	e
	01113	飛鳥(1)遺跡	縄文	e
	01114	飛鳥(2)遺跡	縄文(前・中・後)	e
	01116	飛鳥(4)遺跡	縄文(中・後)	e
	01117	瀬戸子(1)遺跡	縄文(後)	e
	01118	瀬戸子(2)遺跡	縄文(後)	e

河川名	遺跡番号	遺跡名	時期	立地
瀬戸子川	01119	瀬戸子(3)遺跡	縄文(後)	e
	01120	瀬戸子(4)遺跡	縄文(前)	c
	01122	前田(1)遺跡	縄文	e
	01123	前田(2)遺跡	縄文(後)	e
	01224	前田(8)遺跡	縄文	c
飛 鳥 沢	01111	夏井田(8)遺跡	縄文(前)	a
	01112	夏井田(9)遺跡	縄文	a
浜 田 川	01033	田沼森遺跡	縄文(後)	c
	01034	野木和遺跡	縄文(前・中・後)	c
	01035	野木和公園遺跡	縄文(晩)	b
	01036	油川城遺跡	縄文(前)	b
	01038	大堤遺跡	縄文(早・前・後)	c
	01086	岡町(6)遺跡	縄文(前・中)	b
	01088	岡町(8)遺跡	縄文(後)	b
	01089	岡町(9)遺跡	縄文(前・後)	b
	01090	野木和(2)遺跡	縄文(前・後)	b
	01091	野木和(3)遺跡	縄文(後)	b
	01092	野木和(4)遺跡	縄文(前・後)	b
	01093	野木和(5)遺跡	縄文(後・晩)	c
	01094	野木和(6)遺跡	縄文(早・後)	b
	01095	野木和(7)遺跡	縄文(後)	b
	01096	野木和(8)遺跡	縄文(後)	b
01097	野木和(9)遺跡	縄文(前・後)	e	
01098	野木和(10)遺跡	縄文(前・後)	b	
瀬戸子川	01100	西田沢(2)遺跡	縄文(前・後)	g
	01102	西田沢(4)遺跡	縄文(前・後)	c
	01103	西田沢(5)遺跡	縄文(後)	c
	01104	夏井田(1)遺跡	縄文(前)	d
	01105	夏井田(2)遺跡	縄文(前・後)	d
	01106	夏井田(3)遺跡	縄文(前・後)	b

河川名	遺跡番号	遺跡名	時期	立地
浜 田 川	01107	夏井田(4)遺跡	縄文(前・後)	b
	01108	夏井田(5)遺跡	縄文(前・後)	e
	01109	夏井田(6)遺跡	縄文	b
	01110	夏井田(7)遺跡	縄文(後)	e
	01177	羽白沢田(1)遺跡	縄文(中・後)	b
	01178	羽白沢田(2)遺跡	縄文(前)	b
	01179	野木和(12)遺跡	縄文(後)	c
	01180	野木和(13)遺跡	縄文(中・後)	c
	01181	野木和(14)遺跡	縄文(前)	d
	01182	野木和(15)遺跡	縄文(後)	d
	01183	野木和(16)遺跡	縄文(後)	b
	01185	宮本(2)遺跡	縄文(前)	c
	01195	野木和(17)遺跡	縄文	d
	01196	野木和(18)遺跡	縄文	c
	01251	西田沢(6)遺跡	縄文	b
01252	西田沢(7)遺跡	縄文	c	
天田内川	01023	岡町(1)遺跡	縄文(晩)	c
	01024	天田内遺跡	縄文(中・晩)	b
	01082	岡町(2)遺跡	縄文(前・後)	b
	01083	岡町(3)遺跡	縄文(後)	g
	01084	岡町(4)遺跡	縄文(前)	b
	01085	岡町(5)遺跡	縄文(前・後)	b
	01087	岡町(6)遺跡	縄文(前・後)	b
	01184	宮本(1)遺跡	縄文(晩)	c
	01227	天田内(2)遺跡	縄文	c
	01228	天田内(3)遺跡	縄文	c
01253	天田内(4)遺跡	縄文	c	
01266	新城山田(4)遺跡	縄文(中・晩)	b	

第3図 油川地域

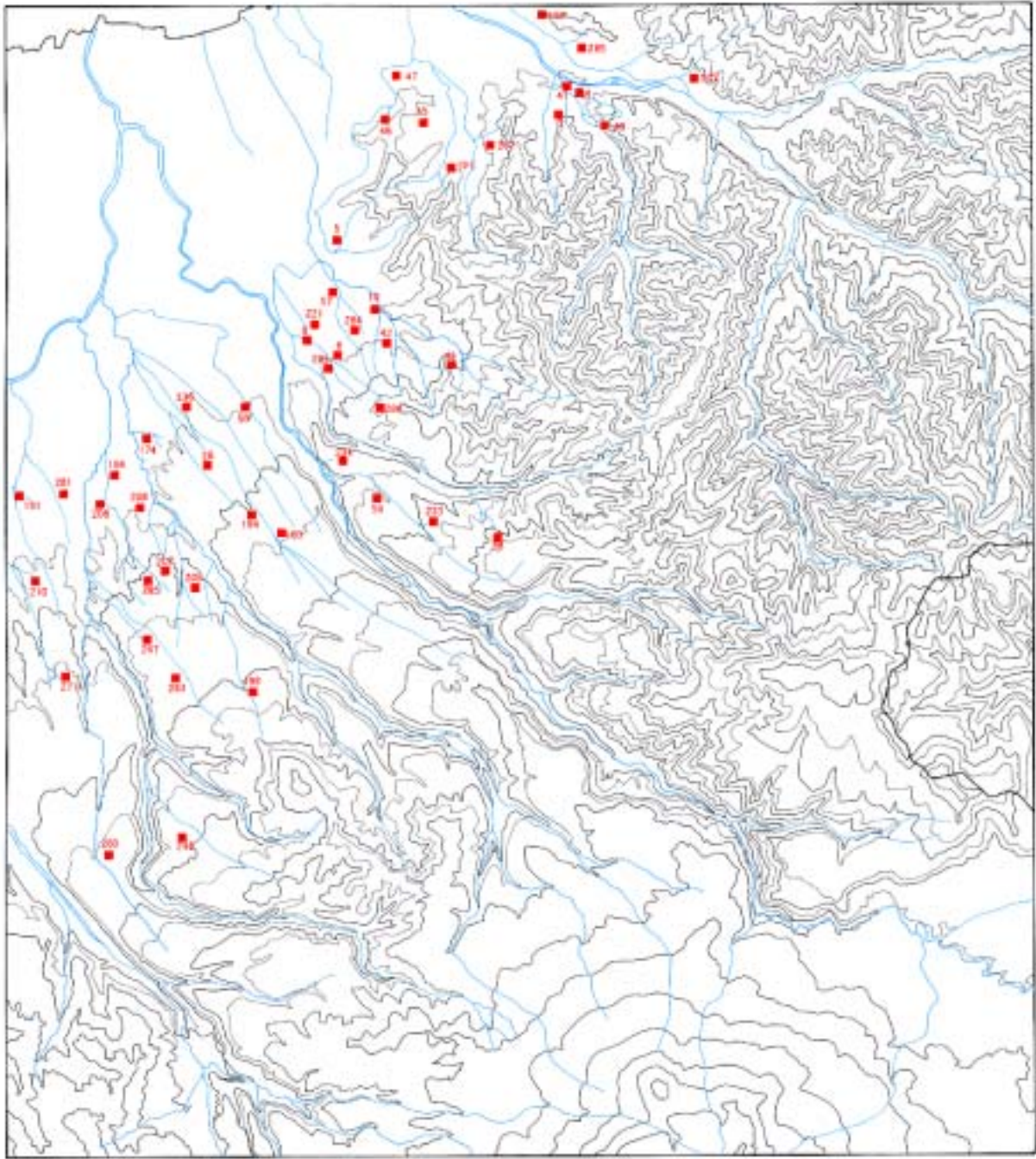


河川名	遺跡番号	遺跡名	時期	立地
新田川	01052	孫内遺跡	縄文(中・後・晩)	b
	01067	新城平岡(1)遺跡	縄文	a
	01069	新城平岡(2)遺跡	縄文(後)	a
	01070	高岡(1)遺跡	縄文(前)	a
	01071	高岡(2)遺跡	縄文(前・後)	h
	01072	高岡(3)遺跡	縄文(後)	h
	01073	高岡(4)遺跡	縄文(前・後)	a
	01074	高岡(5)遺跡	縄文(前・後)	a
	01075	高岡(6)遺跡	縄文	h
	01076	岡部遺跡	縄文	h
	01077	西バイパス(1)遺跡	縄文(前・後)	h
	01078	西バイパス(2)遺跡	縄文(早・前・後)	h
	01166	新城山田遺跡	縄文(晩)	d
	01193	土筆山(1)遺跡	縄文	c
	01203	新城山田(2)遺跡	縄文	d
01255	二股(1)遺跡	縄文	b	
01256	二股(2)遺跡	縄文	c	
沖館川	01011	浪館(1)遺跡	縄文(前)	a
	01017	小三内遺跡	縄文(前・中・晩)	a
	01018	三内堂園遺跡	縄文(前・中)	a

河川名	遺跡番号	遺跡名	時期	立地	
沖館川	01019	三内遺跡	縄文(早・前・中・後)	c	
	01020	三内丸山(1)遺跡	縄文(前・中・後)	a	
	01021	三内丸山(2)遺跡	縄文(早・前・中・後)	a	
	01055	熊沢遺跡	縄文(早・前・中・後)	c	
	01056	石江遺跡	縄文(前)	a	
	01064	三内沢部(1)遺跡	縄文(早・前・中・後・晩)	a	
	01065	近野遺跡	縄文(前・中・後・晩)	a	
	01162	三内沢部(2)遺跡	縄文(中)	a	
	01163	江渡遺跡	縄文(前)	a	
	01239	三内沢部(3)遺跡	縄文	a	
	01249	三内丸山(4)遺跡	縄文(前・中)	a	
	01250	三内丸山(5)遺跡	縄文(中・後・晩)	a	
	01282	三内丸山(6)遺跡	縄文(中・後)	c	
	01287	岩渡小谷遺跡	縄文(前・中)	d	
	入内川	01012	浪館(2)遺跡	縄文(中・晩)	a
		01013	細越遺跡	縄文(晩)、平安	e
		01014	安田近野(1)遺跡	縄文(前・中・後)	d
01015		安田(1)遺跡	縄文(前)	c	
01016		安田(2)遺跡	縄文(前・中)	b	
01025		入内遺跡	縄文(前)	g	

河川名	遺跡番号	遺跡名	時期	立地	
入内川	01165	朝日山(1)遺跡	縄文	c	
	01197	朝日山(2)遺跡	縄文	c	
	01198	朝日山(3)遺跡	縄文	f	
	01212	宗山(2)遺跡	縄文(前)	c	
	01213	宗山(3)遺跡	縄文(前・後)	c	
	01242	龜山(1)遺跡	縄文(後・晩)	c	
	01243	龜山(2)遺跡	縄文(前・中)	c	
	01244	龜山(3)遺跡	縄文(晩)	c	
	01245	桜刈(1)遺跡	縄文(前・中・後)	b	
	01259	桜刈(2)遺跡	縄文	b	
	荒川	01161	新町野遺跡	縄文(前・後)	b
		01176	小牧野遺跡	縄文(前・中・後・晩)	b
01186		山吹(1)遺跡	縄文(前・中・後)	b	
01187		山吹(2)遺跡	縄文	b	
01188		山吹(3)遺跡	縄文	b	
01189		野木遺跡	縄文	b	
01217		葛野(1)遺跡	縄文	b	
01218		葛野(2)遺跡	縄文(前)	b	
01237		山吹(4)遺跡	縄文	b	
01271		山口遺跡	縄文(前・中・後)	b	

第4図 青森西部地域

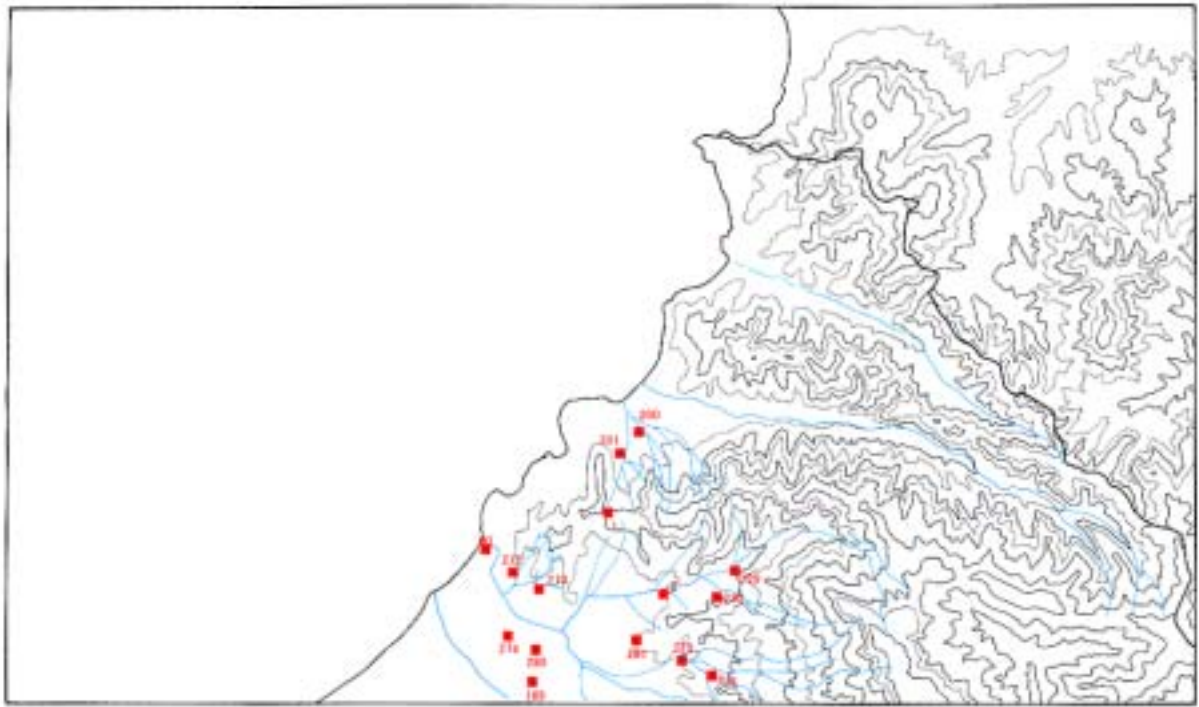


河川名	遺跡番号	遺跡名	時期	立地
合子沢川	01164	横内遺跡	縄文(前)	b
	01206	横内(2)遺跡	縄文(前・中)	g
	01246	合子沢山崎(1)遺跡	縄文	a
	01247	雲谷山崎遺跡	縄文	a
	01260	野木(2)遺跡	縄文	a
	01261	合子沢松森(1)遺跡	縄文	a
	01263	雲谷山吹(2)遺跡	縄文	a
	01285	雲谷山吹(4)遺跡	縄文	a
	横内川	01028	四ツ石遺跡	縄文(前・後)
01050		阿部野遺跡	縄文(早・中・後)	a
01160		田茂木野遺跡	縄文(後・晩)	a
01194		四ツ石(2)遺跡	縄文(中・後)	b
01199		雲谷山吹(1)遺跡	縄文(後)	a
01207		桜峯(1)遺跡	縄文(前・中・後)	b
01208		桜峯(2)遺跡	縄文(前・中・後)	b
01209		磯山遺跡	縄文(前・中・後)	b
01215		四ツ石(3)遺跡	縄文	b
駒込川	01236	大矢沢里見(1)遺跡	縄文	a
	01054	梨の木平遺跡	縄文(前・中・晩)	b
	01233	深沢(1)遺跡	縄文(後)	b

河川名	遺跡番号	遺跡名	時期	立地		
駒込川	01234	深沢(2)遺跡	縄文(前・後)	b		
	赤川	01005	芦山遺跡	縄文(前・中)	a	
		01006	玉清水(1)遺跡	縄文(晩)	a	
		01008	玉清水(3)遺跡	縄文(前)	a	
		01010	月見野遺跡	縄文(前・後)	a	
		01042	沢山(1)遺跡	縄文(晩)	a	
		01043	沢山(2)遺跡	縄文	d	
		01057	堂沢遺跡	縄文(早・前・中・後・晩)	a	
		01058	佃遺跡	縄文(前)	e	
		01068	梨の木平牧場遺跡	縄文(中)	b	
		01221	月見野(3)遺跡	縄文(後)	a	
		01235	月見野(4)遺跡	縄文(後)	a	
		01264	月見野(5)遺跡	縄文	a	
		01286	月見野(6)遺跡	縄文(前・晩)	a	
		野内川	01003	築木館岩淵遺跡	縄文(前・後・晩)	c
			01004	築木館布引遺跡	縄文(前・中・後)	h
01045	稲山遺跡		縄文(前・後)	c		
01046	桑原遺跡		縄文	c		
01047	後やち遺跡		縄文	d		
01049	山の井遺跡	縄文(後)	c			

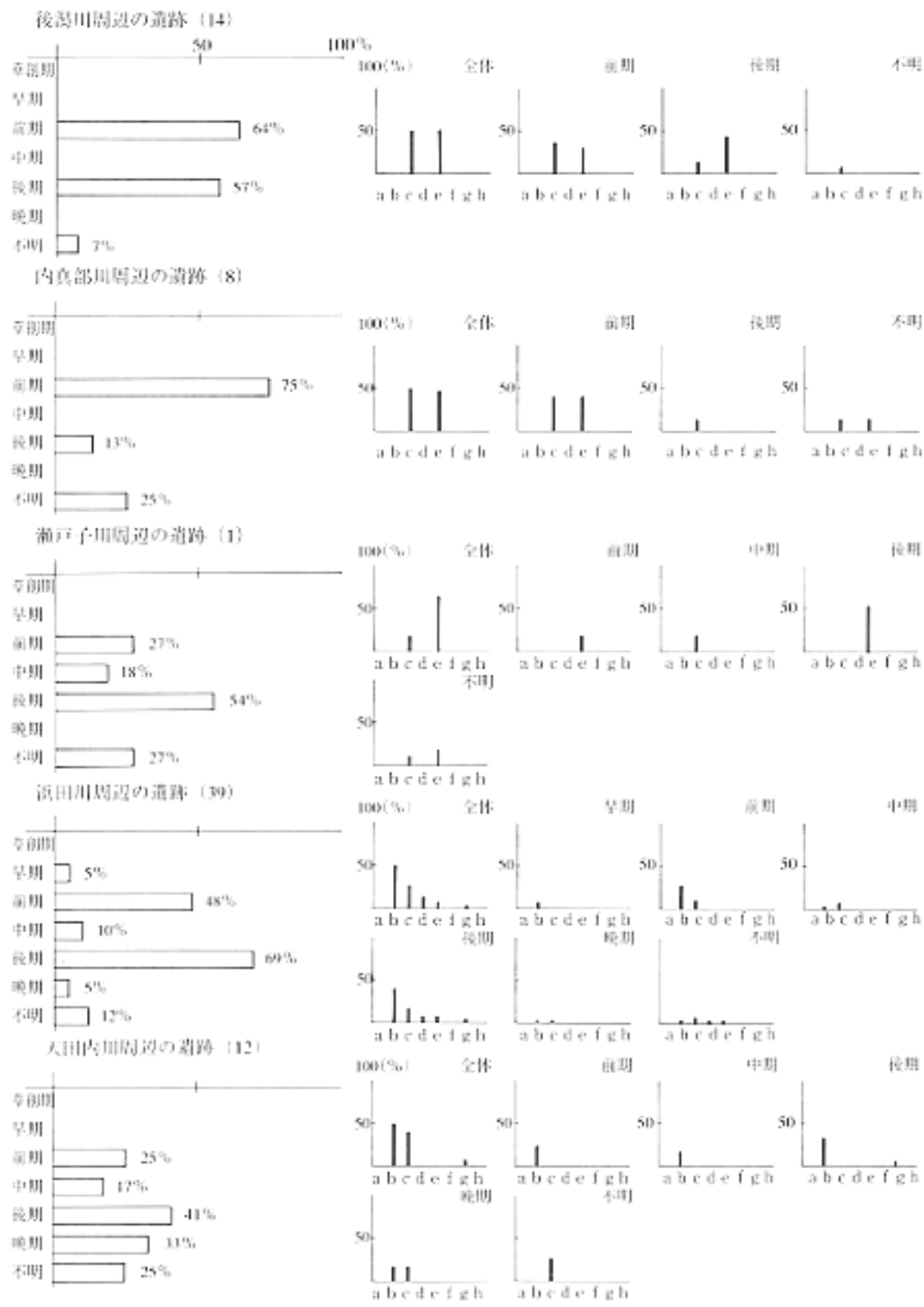
河川名	遺跡番号	遺跡名	時期	立地
野内	01191	牛蒡畑遺跡	縄文(中)	h
	01202	宮田山下(1)遺跡	縄文(前)	c
	01232	諏訪沢山辺(1)遺跡	縄文	c
	01265	扇沢遺跡	縄文	h

第5図 青森東部地域

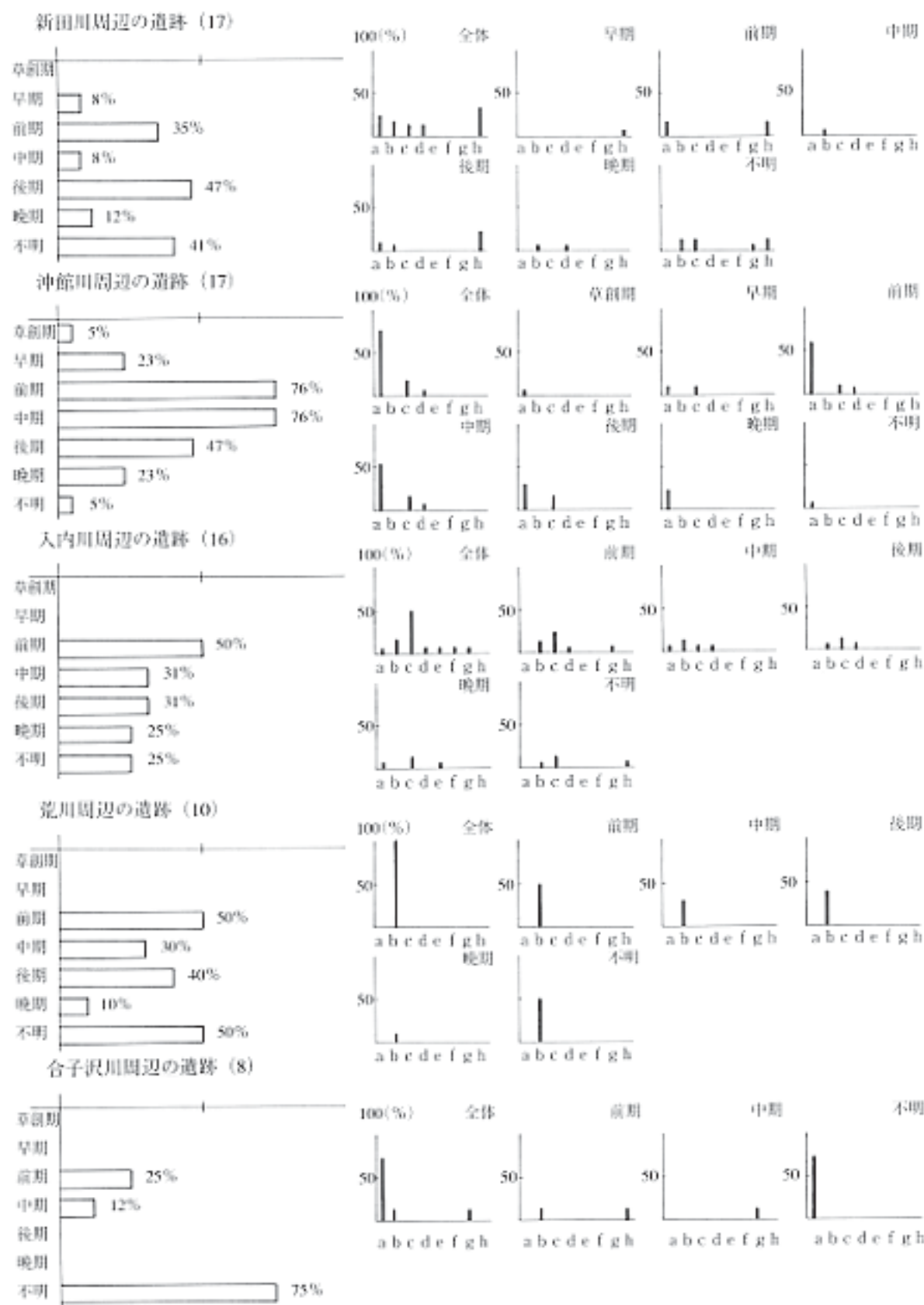


河川名	遺跡番号	遺跡名	時期	立地
費船川	01002	長森遺跡	縄文(晩)	h
	01060	野内遺跡	縄文(晩)	e
	01189	玉水遺跡	縄文	e
	01190	宮田館遺跡	縄文	c
	01229	葛瀬沢(1)遺跡	縄文(後)	h
	01230	葛瀬沢(2)遺跡	縄文(晩)	c
	01231	宮田米山(1)遺跡	縄文	c
	01272	鈴森(1)遺跡	縄文(後)	c
	01273	鈴森(2)遺跡	縄文(後)	e
	01274	小金沢遺跡	縄文(後)	e
	01275	米山(1)遺跡	縄文(中・晩)	a
	01280	玉水(4)遺跡	縄文(前・中)	e
	01281	上野尻遺跡	縄文(前)	c
	根井川	01001	山野峠遺跡	縄文(後)
南東の川	01200	久栗坂浜田(1)遺跡	縄文(晩)	h
	01201	久栗坂浜田(2)遺跡	縄文(中)	h

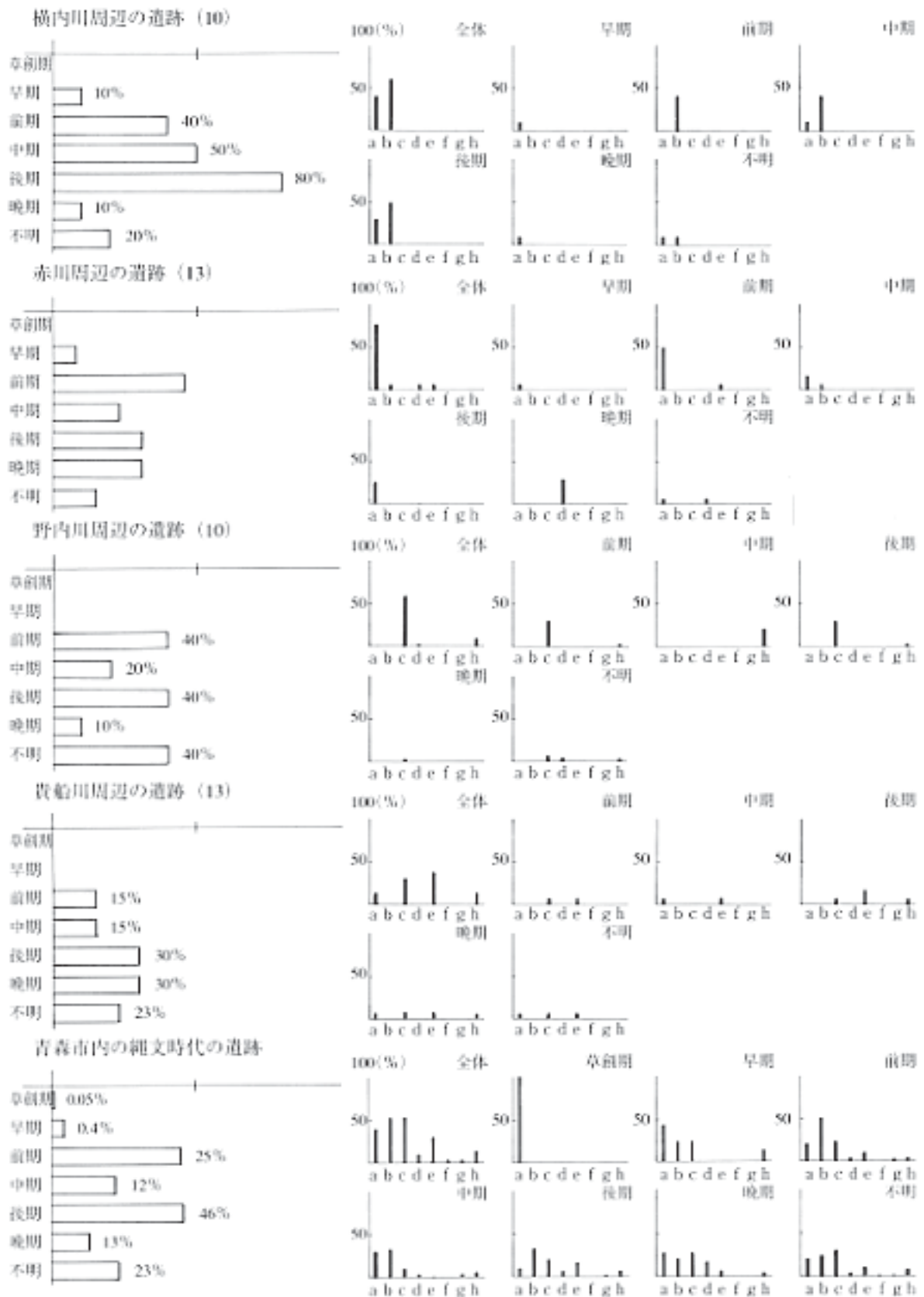
第6図 浅虫地域



第7図 各河川周辺の遺跡の時期と立地状況の割合



第8図 各河川周辺の遺跡の時期と立地状況の割合



第9図 各河川周辺の遺跡の時期と立地状況の割合

油川地域の河川周辺に立地する遺跡

油川地域を流れる主な河川には、後潟川、内真部川、瀬戸子川、奥内川、飛鳥沢、浜田川、天田内川がある。

後潟川、内真部川、瀬戸子川、奥内川、飛鳥沢は、大倉岳山地に源を發し、そこから延びる低丘陵を開析して、平野部をとおり陸奥湾に注いでいる。飛鳥沢、瀬戸子川、奥内川、内真部川、後潟川周辺では、大倉岳山地から延びる低丘陵の裾部や、平野部に分布する遺跡が多い。

後潟川周辺の遺跡は、14遺跡が存在しており、前期に存続していた遺跡は9遺跡、後期は8遺跡である。cとeの立地状況を呈する遺跡が多い。

内真部川周辺の遺跡は8遺跡が存在しており、前期に存続していた遺跡は6遺跡、後期は1遺跡である。cとeの立地状況を呈する遺跡が多い。

奥内川周辺には、2遺跡が存在しており、前期に存続していた遺跡が1遺跡、後期は1遺跡であり、2遺跡ともにcの立地状況を呈する。

瀬戸子川周辺には11遺跡が存在しており、前期に存続していた遺跡は3遺跡、中期は2遺跡、後期は6遺跡である。eの立地状況を呈する遺跡が多い。

飛鳥沢周辺には、2遺跡が存在しており、前期に存続していた遺跡が1遺跡、不明は1遺跡であり、2遺跡ともにbの立地状況を呈する。

浜田川、天田内川は、大倉岳山地に源を發し、海成段丘である野木和台地を開析して平野部をとおり陸奥湾に注いでいる。遺跡は、上流域では両岸の丘陵の裾部に分布し、中流域、下流域では野木和台地上に濃密に分布している。遺跡が濃密に分布する野木和台地は、広い平坦面を有する台地ではなく、若干の起伏をもった台地である。

浜田川周辺には、39遺跡が存在している。そのうち、早期に存続していた遺跡は2遺跡、前期は19遺跡、中期は4遺跡、後期は27遺跡、晩期は2遺跡である。bとcの立地状況を呈する遺跡が多い。

天田内川周辺には12遺跡が存在している。前期に存続していた遺跡は3遺跡、中期は2遺跡、後期は5遺跡、晩期は4遺跡である。bとcの立地状況を呈する遺跡が多い。

青森西部地域の河川周辺に立地する遺跡

青森西部地域を流れる主な河川には、新田川、沖館川、入内川がある。

新田川は梵珠山地に源を發する新城川と大釈迦丘陵に源を發する孫内川、二股川が合流した河川であり、海成段丘である野木和台地をとおり陸奥湾に注いでいる。ここでは便宜的に上、中流域の新城川、孫内川、二股川と下流域の新田川を統括して、新田川として扱った。新田川周辺は、下流域では扇状地性低地ないし東岸に広がる浪館台地の縁辺部に濃密に分布しており、中流域では梵珠山地から延びる丘陵の裾部、上流域では谷底平野にいくつか分布している。29遺跡が存在し、早期に存続していた遺跡は1遺跡、前期は6遺跡、中期は1遺跡、後期は8遺跡、晩期は2遺跡である。hの立地状況を呈する遺跡が多い。

沖館川は大釈迦丘陵に源を發し、浪館台地を開析して、平野部をとおり陸奥湾に注いでいる。上流域では両岸の丘陵の裾部に少数の遺跡が存在し、中流域では広い平坦面を有する浪館台地上に三内丸山遺跡などの遺跡が濃密に分布している。沖館川周辺には、17遺跡が存在している。草創期に存続していた

遺跡は1遺跡、早期は4遺跡、前期は13遺跡、中期は13遺跡、後期は8遺跡、晩期は4遺跡である。aの立地状況を呈する遺跡が多い。

入内川は八甲田火山性台地に源を發し、現在は高田付近で荒川と合流しているが、水系図では、荒川とは合流しておらず、上流域で八甲田火山性台地を開析し、大釈迦丘陵と青森平野の境界となる細越、安田地区を北流し、沖館川に合流している。入内川の旧流路においては、中流域では前述のとおり細越、安田付近で大釈迦丘陵と青森平野の境界を北流しており、周知の遺跡は大釈迦丘陵の裾部に帯状に分布している。入内川周辺には16遺跡が存在している。前期に存続していた遺跡は8遺跡、中期は5遺跡、後期は5遺跡、晩期は4遺跡である。cの立地状況を呈する遺跡が多い。

青森東部地域の河川周辺に立地する遺跡

青森東部地域を流れる主な河川には、荒川、合子沢川、横内川、駒込川、赤川がある。

合子沢川、横内川、駒込川は八甲田火山性台地に源を發しており、同じく八甲田火山性台地に源を發する荒川と平野部でそれぞれ合流する。これらの河川の流域は、八甲田火山群の火砕流による軽石質火山碎屑物によって構成された台地で、緩傾斜の平坦面が広がっている。そして、この台地は、これらの河川によって開析されており、旧河川の流路と考えられる谷地形も地図上で幾筋か確認できる。また、この台地は流水の侵食に弱いことから、駒込川、横内川、合子沢川、荒川の上流域の両岸は急傾斜の谷が続き、谷底平野はそれほど発達していない。これらの河川の周辺の遺跡は、主に八甲田火山群に続く緩傾斜の平坦面をもつ舌状台地上に数多く分布している。

荒川周辺には、10遺跡が存在しており、そのうち、前期に存続していた遺跡5遺跡、中期は3遺跡、後期は4遺跡、晩期は1遺跡である。中流域付近の舌状台地上には、環状列石を主体とする小牧野遺跡が存在している。bの立地状況を呈する遺跡が多い。

合子沢川周辺には、8遺跡が存在しており、そのうち、前期に存続していた遺跡は2遺跡、中期は1遺跡である。aの立地状況を呈する遺跡が多い。

横内川は、平野部と丘陵部の境界付近で幾筋かの小川と合流し、平野部で荒川と合流する。横内川周辺には、10遺跡が存在しており、そのうち、早期に存続していた遺跡は1遺跡、前期は4遺跡、中期は5遺跡、後期は8遺跡、晩期は1遺跡である。aとbの立地状況を呈する遺跡が多い。

駒込川は上流域、中流域で、小さな沢が幾筋か合流している。駒込川周辺には3遺跡が存在している。駒込川上流域は、「PH2という強酸性の湧水が湧出する箇所があるため、ここから下流の駒込川は一匹の魚も住めない酸性河川」(青森県 1982)となっており、本流沿いに現在のところ遺跡は分布しておらず、3遺跡は駒込川に合流する深沢の周辺に存在しているという事実は興味深い。3遺跡のうち、前期に存続していた遺跡は2遺跡、中期は1遺跡、後期は2遺跡、晩期は1遺跡である。bの立地状況を呈する遺跡が多い。

赤川は、東岳山地に源を發し、中流域には平野に向かって緩やかな平坦面をもって傾斜する台地状の低丘陵が広がっており、谷底平野、河岸段丘はそれほど発達していない。遺跡は、主に東岳山地から延びる台地状の低丘陵上に分布している。赤川周辺の縄文時代の遺跡は、13遺跡が確認されている。そのうち、早期に存続していた遺跡は1遺跡、前期は6遺跡、中期は3遺跡、後期は4遺跡、晩期は4遺跡である。aの立地状況を呈する遺跡が多い。

浅虫地域の河川周辺に立地する遺跡

浅虫地域を流れる主な河川には、野内川、貴船川、根井川、浅虫川がある。いずれも、青森平野東部の東岳山地に源を発しており、これらの河川の中流域、下流域には東岳山地に続く小丘陵が広がっている。

野内川は、上流域で貴船川に分岐し、中流域沿いには谷底平野、さらにその両側に河岸段丘がみられ、下流域には扇状地性の低地が広がる。遺跡は、下流域の扇状地性の低地、その両側の丘陵の斜面裾部に分布しているものが多い。野内川周辺の縄文時代の遺跡は10遺跡が存在し、前期に存続していた遺跡は4遺跡、中期は2遺跡、後期は4遺跡、晩期は1遺跡である。cの立地状況を呈する遺跡が多い。

貴船川は、下流域には扇状地性の低地が広がっており、中流域には谷底平野が存在する。遺跡は、下流域の海岸平野や扇状地性の低地、その両側の丘陵の斜面裾部に数多く分布している。13遺跡が分布しており、前期に存続していた遺跡は2遺跡、中期は2遺跡、後期は4遺跡、晩期は4遺跡である。cとeの立地状況を呈する遺跡が多い。

根井川、浅虫川は、いずれも扇状地性の低地を有するが、縄文時代の遺跡は分布していない。

以上の分析から、数量的にある程度遺跡がまとまって分布している河川に関して、各々の河川の周辺に分布する遺跡の立地状況に着目すると、以下のように河川を分類することができる。

aの立地状況を呈する遺跡が多い河川

bの立地状況を呈する遺跡が多い河川

cないしeの立地状況を呈する遺跡が多い河川

hの立地状況を呈する遺跡が多い河川

aの立地状況を呈する遺跡が数多く分布する河川は、沖館川、合子沢川、赤川である。これらの河川にみられる特徴として、合子沢川は、時期不明の遺跡が多いため判断材料が乏しいが、遺跡の存続時期において、円筒土器文化が隆盛した前期と中期の占める割合が高いという点、沖館川周辺に分布する三内遺跡、三内丸山(2)遺跡、三内沢部(1)遺跡、熊沢遺跡や、赤川周辺に分布する蛭沢遺跡のように、草創期や早期といった比較的早い時期からはじまって長時期にわたって存続していた遺跡が存在している点が挙げられる。

bの立地状況を呈する遺跡が数多く分布する河川は、浜田川、天田内川、荒川、横内川である。これらの河川にみられる特徴として、遺跡の存続時期において、後期と前期の占める割合が高いという点が挙げられる。浜田川、天田内川、横内川の周辺では、早期に存続していた遺跡がいくつか存在している。

cとeの立地状況を呈する遺跡が数多く分布する河川は、後潟川、内真部川、瀬戸子川、入内川、野内川、貴船川である。これらの河川に見られる特徴は、bの立地状況を呈する遺跡が多い河川と同様に、遺跡の存続時期において、前期と後期の占める割合が高いという点が挙げられる。入内川、野内川、貴船川においては、晩期に存続していた遺跡がいくつか分布している。

hの立地状況を呈する遺跡が数多く分布する河川は、新田川である。新田川は、立地状況における各類型の比率においては、hの類型が高いが、それに次いでa、b、c、dの立地状況を呈する遺跡がほぼ同じ比率で分布している。新田川にみられる特徴は、遺跡の存続時期において、b、cとeの立地状況を呈する遺跡が多い河川と同様に、前期と後期の占める割合が高いという点である。

d、f、gの立地状況を示す遺跡は少なく、各々の河川において数量的なまとまりは認められなかつ

たが、dの立地状況を呈する遺跡は、晩期において若干数が認められる。

そこで、以上のような各々の河川周辺の遺跡における立地状況と時期のまとめから、小林のセトルメントパターン分類における各類型の遺跡の性格を、本項の遺跡立地状況の分類に当てはめながら、市内における縄文時代の遺跡の立地の変遷を時期ごとに考えてみたい。

小林のセトルメントパターンにおいては以下のように類型化されている。

A.「広い平坦面を有する台地上に立地し、多数の住居跡および貯蔵穴などのピット群、墓壙群など」などが存在する遺跡

B.「馬の背状の舌状台地先端部などに立地し、数棟から十数棟におよぶ住居跡」が存在する遺跡

C.「斜面裾部または丘陵頂部付近などの狭い平坦面に立地し、1～2棟の住居跡」が存在する遺跡

D.「かなりの急勾配の斜面地などにも立地し、住居跡」がなく、「まれに正体不明のピットをもつ」遺跡

E.「A～Dのセトルメントから離れて独立的に存在する墓地、デポ、土器製作用粘土の採掘跡、石器製造跡など」

F.「遺物、遺構などの実体として確認しえないが、一晚だけのキャンプ地とか、道・狩猟・採集の場」

そこで地形的立地状況から、本項におけるaとeの立地状況を呈する遺跡を、小林の分類におけるA、bの立地状況を呈する遺跡をB、c、e、hの立地状況を呈する遺跡をCに当てはめ、aを拠点的な大集落（以下、拠点集落）、bを集落を構成する人口が比較的多い集落（以下、中規模集落）、c、e、hを更に小規模な居住地と捉えることとする。小林のセトルメントパターンにおけるE、Fに相当すると考えられる遺跡は、本項における立地状況の分類においては、判断し得ないため、ここでは集落を中心に論を進めることとする。

草創期・早期は、aの立地状況を呈する遺跡が多く、沖館川、赤川周辺の遺跡がその典型と考えられ、浜田川、新田川、横内川にも若干数が散見できる。草創期と早期は、遺跡の絶対数が少ないため、当該時期の遺跡の立地状況は、今後の発掘調査例の増加によって、再考の余地があるものと考えられる。

前期は、本項で分析対象として挙げた市内に存在するほとんどの河川において、後述する後期とともに遺跡の存続時期に占める割合が高い時期であり、市内全域に当該時期の遺跡が確認されている。恐らく、これらの前期に存続していた遺跡は、円筒土器文化期に属するものが大半を占めるとと思われる。前期においては、bの立地状況を呈する遺跡が最も多く、次いで、aの立地状況を呈する遺跡、cの立地状況を呈する遺跡、eの立地状況を呈する遺跡が認められることから、中規模集落が数多く存在し、その数に次いで拠点集落が存在し、それらに関連したさらに小規模な居住地が各所に点在するという状況が成立したことが想定できる。拠点集落が数多く存在していたことが想定できる河川は、三内丸山遺跡が存在する沖館川周辺、赤川周辺、合子沢川周辺であり、中規模集落が数多く存在していたことが想定できる河川は、浜田川周辺、天田内川周辺、荒川周辺、横内川周辺である。

中期は、前述した前期や後述する後期に比べ、局所的に遺跡が分布するという傾向があり、中期に存続していた遺跡が比較的数量多く分布する河川はいくつかに限定される。中期においては、aの立地状況を呈する遺跡が更に多くなり、bの立地状況を呈する遺跡と数量的にほぼ同じ割合になる。そして、cの立地状況を呈する遺跡がそれに続く。したがって、前期に成立した形態がより成熟し、局所的に点在する拠点集落を起点として、拠点集落と有機的に結び付く衛星的な中規模集落が、ある一定範囲内に存在するという状況が想定できる。沖館川周辺にはaの立地状況を呈する中期に存続していた遺跡が数多

く分布しており、三内丸山遺跡が代表される。三内丸山遺跡は、発掘調査によって、縄文時代の前期・中期の拠点集落跡であったことが確認されている。

後期は、前期と同様に市内に所在する河川において、遺跡の存続時期に占める割合が高い時期であり、ほぼ市内全域に当該時期の遺跡が確認されている。遺跡aの立地状況を呈する遺跡が少なくなり、bの立地状況を呈する遺跡とcの立地状況を呈する遺跡が多くなる。このことから、前期や中期にみられるような拠点集落と中規模集落の分布形態が崩れ、数棟～十数棟の住居によって構成される中規模の集落が大半を占め、それに関連する小規模な居住地が広い範囲にわたって分散するという状況を想定することができる。ただし、赤川周辺に分布する後期に存続していた遺跡は、aの立地状況を示すものが多く、拠点集落の存在を想定することができる。中規模集落が数多く存在していたことが想定できる河川は、浜田川周辺、天田内川周辺、荒川周辺、横内川周辺である。小規模な居住地が数多く存在していたことが想定できる河川は、後潟川周辺、内真部川、貴船川周辺である。

晩期については、当該時期に存続していた遺跡はそれほど多くなく、根拠に乏しいが、その他の時期に比べ、立地状況に際立った特徴がみられず、a～eの立地状況がほぼ同率で認められることから、集落の立地に関して前期、中期、後期ほど規則性がなかったことが想定される。浜田川以北の河川の周辺には当該時期全く分布していない。

以上、一つの河川の周辺に存在する遺跡をひとまとまりとして、遺跡の立地状況と存続時期の関係から考察を行ったが、各々の河川の周辺に分布する遺跡は上流域、中流域、下流域における多少の違いはあるものの、ほぼ同様の地形的条件に制約されており、遺跡の立地状況や存続時期にある程度の規則性が認められる。今回基準とした小林のセトルメントパターンは、多摩ニュータウン遺跡群における克明な分析調査と広域的な発掘調査によって得られた情報に基づいて分類がなされたものであるが、本項は、未調査例の多い市内の遺跡について主に地図上から認められる地形的立地状況から分類を行ったものであり、遺跡の立地状況の類似だけで、直ちに小林のセトルメントパターンと照合することが妥当かという問題点がある。また、遺跡の地形的立地状況と遺跡の規模や集落構造を直ちにイコールとして結び付けて考えるということに関しても、市内の遺跡の発掘調査例の増加によって、本項の分析はまだ再考の余地があると考えられる。しかし、市内で発掘調査が実施されたいくつかの遺跡について、その調査成果と本項の分析結果を併せて考えてみると、小林のセトルメントパターンにおける地形的立地状況と遺跡の時期や性格、規模の関係にある程度類似した結果を認めることができる。このことから、集落を営むために選定された土地の地形は、縄文時代の人々が集落を形作るための「設計図」において、極めて重要な要素であったと考えられる。

本項では、一つの水系を集団の自己完結的な行動範囲と仮定したが、未調査の遺跡が多いことから、それぞれの水系における遺跡相互の関係については、言及するまでに至ることができなかった。今後、地形的立地状況から想定される遺跡の性格、規模を踏まえながら、明らかにしていくことが重要であろう。市内に所在する遺跡は、前述のように未調査のものが多く、遺跡の存続時期や性格が判然としない遺跡も多い。また、遺跡範囲が近接し、さらに存続時期が同様であっても、別々の遺跡として登録されている場合がかなり認められる。このような遺跡について、時期や性格の推定、あるいは統合を行う場合、遺跡の地形的立地状況から想定される遺跡の規模や性格を念頭において発掘調査に臨むことも重要であろう。今後の発掘調査、分布調査における地形的立地状況の把握の重要性を指摘し結語としたい。

(注1 例えば、前期・中期・後期にわたって存続していた遺跡の場合、それぞれの時期でカウントしているため、一つの河川の周辺に存続する遺跡数と、それぞれの時期に存続していた遺跡の数の総和は一致しない。)

(設楽 政健)

引用・参考文献

- | | | | |
|----------|------|----------------------|---------------|
| 青森県教育委員会 | 1992 | 『青森県遺跡地図』 | |
| 青森市教育委員会 | 1997 | 『市内遺跡詳細分布調査報告書』 | |
| 市原 壽文 | 1985 | 「考古学的立地論」 | 『岩波講座 日本考古学2』 |
| 岩井 武彦他 | 1982 | 『土地分類基本調査青森西部』 | |
| 岩井 武彦他 | 1983 | 『土地分類基本調査青森東部』 | |
| 岩井 武彦他 | 1984 | 『土地分類基本調査油川』 | |
| 岩井 武彦他 | 1985 | 『土地分類基本調査浅虫』 | |
| 可児 通宏 | 1993 | 「縄文時代のセトルメントシステム」 | 『季刊考古学 第44号』 |
| 岡田 康弘 | 1995 | 「円筒土器文化の巨大集落」 | 『季刊考古学 第50号』 |
| 菊地 真 | 1997 | 「遺跡立地の環境考古学的研究とその展望」 | 『史学研究 第22号』 |
| 加藤 晋平他編 | 1982 | 『縄文文化の研究8』 | |
| 小林 達雄 | 1973 | 「多摩ニュータウンの先住者」 | 『月刊文化財 第112号』 |
| 小林 達雄 | 1986 | 「原始集落」 | 『岩波講座 日本考古学4』 |
| 小林 達雄 | 1993 | 「縄文集団における二者の対立と合一性」 | 『論苑 考古学』 |
| 小林 達雄 | 1993 | 「縄文時代の集落」 | 『季刊考古学 第44号』 |
| 谷口 康浩 | 1993 | 「縄文時代集落の領域」 | 『季刊考古学 第44号』 |
| 西田 正則 | 1985 | 「縄文時代の環境」 | 『岩波講座 日本考古学2』 |
| 原田 昌幸 | 1993 | 「遊動と定住」 | 『季刊考古学 第44号』 |
| 水野 正好 | 1969 | 「縄文時代集落復元の基礎的操作」 | 『古代文化 第21号』 |
| 宮崎 博 | 1986 | 「土地と縄文人」 | 『物質文化 第47号』 |

ま と め

昨今、青森市をとりまく状況は刻々と変化しており、新しい県総合運動公園建設事業、中核工業団地造成事業をはじめとし、東北新幹線フル規格化など、青森市の発展へ向かう開発計画が増加する中、当教育委員会では、今年度も本事業を実施いたしました。

今年度では、平成4年度に本事業を実施してから6年目となります。周知の埋蔵文化財包蔵地の現状確認を行い、埋蔵文化財保護の基礎資料となる遺跡台帳の整備・充実を図ると同時に新規登録を行った遺跡数も年を追うごとに増加しております。

今年度、当委員会では、各種開発事業に係わる野木遺跡、新町野遺跡、熊沢遺跡の発掘調査を実施いたしました。また、これまでも当委員会では多くの埋蔵文化財包蔵地の発掘調査を実施してまいりましたが、そのほとんどが数年来の新規登録遺跡や、範囲拡張となった周知の埋蔵文化財包蔵地の発掘調査であり、開発事業の増加とともに本事業の重要性も増しております。

今後増加の一途をたどるとされる各種開発事業に対し、常に正確かつ最新の資料を提示するためにも、本事業の調査目的である埋蔵文化財の保護と埋蔵文化財保護思想の啓蒙の重要性を認識し、当委員会では今後も本事業を継続し、精力的な活動を鋭意展開していきたいと考えております。

最後になりましたが、今回の分布調査と本報告書の刊行にあたり、現地踏査においては、本事業の主旨をご理解いただき快く踏査をさせていただきました土地所有者の方々に感謝の意を表しますとともに、本書が埋蔵文化財保護行政の推進の一助となることを願う次第であります。

(担当者一同)

報 告 書 抄 録

ふりがな	しないいせきしょうさいぶんぶちょうさほうこくしょ							
書名	市内遺跡詳細分布調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	青森市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第39集							
編著者名	設楽政健 沼宮内陽一郎							
編集機関	青森市教育委員会							
所在地	〒030-8555 青森県青森市中央一丁目22-5 TEL 0177-34-1111							
発行年月日	西暦 1998年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しないいせき 市内遺跡	あおもりけん あおもりし 青森県青森市 青森市内	02201				19970401		
						19980331		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
市内遺跡		縄文 平安				縄文土器 土師器	新規登録 名称変更 統合	4 1 2

既刊埋蔵文化財関係報告書一覧

青森市の文化財	1	1962	『三内霊園遺跡調査概報』
〃	2	1965	『四ツ石遺跡調査概報』
〃	3	1967	『玉清水遺跡調査概報』
〃	4	1970	『三内丸山遺跡調査概報』
〃	5	1971	『野木和遺跡調査報告書』
〃	6	1971	『玉清水 遺跡発掘調査報告書』
〃	7	1971	『大浦遺跡調査報告書』
〃	8	1973	『孫内遺跡発掘調査報告書』
		1979	『蚩沢遺跡』
		1983	『四戸橋遺跡調査報告書』
青森市の埋蔵文化財		1983	『山野峠遺跡』
〃		1985	『長森遺跡発掘調査報告書』
〃		1986	『田茂木野遺跡発掘調査報告書』
〃		1987	『權内城跡発掘調査報告書』
〃		1988	『三内丸山 遺跡発掘調査報告書』
青森市埋蔵文化財調査報告書第16集	1991		『山吹(1)遺跡発掘調査報告書』
〃	第17集	1992	『埋蔵文化財出土遺物調査報告書』
〃	第18集	1993	『三内丸山(2)遺跡発掘調査概報』
〃	第19集	1993	『市内遺跡発掘調査報告書』
〃	第20集	1993	『小牧野遺跡発掘調査概報』
〃	第21集	1994	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第22集	1994	『小三内遺跡発掘調査報告書』
〃	第23集	1994	『三内丸山(2)・小三内遺跡発掘調査報告書』
〃	第24集	1995	『横内遺跡・横内(2)遺跡発掘調査報告書』
〃	第25集	1995	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第26集	1995	『桜峯(2)遺跡発掘調査報告書』
〃	第27集	1996	『桜峯(1)遺跡発掘調査概報』
〃	第28集	1996	『三内丸山(2)遺跡発掘調査報告書』
〃	第29集	1996	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第30集	1996	『小牧野遺跡発掘調査報告書』
〃	第31集	1997	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第32集	1997	『桜峯(1)遺跡発掘調査概報』
〃	第33集	1997	『新町野遺跡試掘調査報告書』
〃	第34集	1997	『葛野(2)遺跡発掘調査報告書』
〃	第35集	1997	『小牧野遺跡発掘調査報告書』
〃	第36集	1998	『桜峯(1)遺跡発掘調査報告書』
〃	第37集	1998	『新町野遺跡発掘調査報告書』
〃	第38集	1998	『野木遺跡発掘調査報告書』
〃	第39集	1998	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第40集	1998	『小牧野遺跡発掘調査報告書』
〃	第41集	1998	『野木遺跡発掘調査概報』
〃	第42集	1998	『熊沢遺跡発掘調査概報』

青森市埋蔵文化財調査報告書第39集

市内遺跡詳細分布調査報告書

発行年月日 平成10年3月31日

発行 青森市教育委員会

〒030 - 8555 青森市中央一丁目22 - 5

TEL 0177 - 34 - 1111

印刷 東北印刷工業株式会社

〒030 - 0902 青森市合浦一丁目2-12

TEL 0177 - 42 - 2221
